

主な登場人物

朝倉美途―JRA騎手

海野颯希―右同

橘川(千堂)寿々芽―JRA騎手

早坂姫香―右同

若草雅人―JRA騎手

工藤貴康―JRA騎手

猿渡広道―JRA騎手

海野穰一―右同・颯希の父

北光邦―調教師

和田学―右同

石村春樹―右同

垣内力也―右同

里見隆三―画家

赤坂―馬主

麻生泉美―巫女・中学生

木崎真央―泉美の親友

○栗東トレーニングセンター(以下栗東トレセン)調教コース(早朝)
ウッドチップコースを併せ馬で走っている二頭。それぞれ鞍上の
橘川寿々芽(29)と早坂姫香(24)。

○同・四階スタンド・ペランダ(早朝)

寿々芽と姫香の調教の様子を見ている海野颯希(15)と朝倉美
途(15)

二人の輝く瞳。颯希の父、騎手の穰一(51)が来て。

穰一「降りて挨拶してこい」

振り返る二人。穰一へ行けと顎でコナして。

颯希「行こう！」

美途「うんっ！」

駆け出す二人。

○同・調教スタンド前(早朝)

颯希と美途が待っているところへ、寿々芽と姫香の騎乗馬が戻っ
てくる。

それぞれ下馬し、厩務員に馬を引き渡す二人。

颯希・美途「おはようございますー！」

深く頭を下げる二人。

寿々芽「(姫香に)海野さんの娘さんと朝倉オーナーの姪っ子」

姫香「ああ。競馬学校受かった」

颯希「はい！海野颯希です！よろしくお願いします！」

美途「朝倉美途です！よろしくお願いします！」

姫香「うるさいくらいにいい挨拶。学校、受け答えに厳しい教官もいる
から、それくらいでちょうどいいよ」

颯希・美途「はい！」

寿々芽「ああ、若さが眩しい」

姫香「でしようねっ。三十路はすぐそこだもんね」

寿々芽「うるさいよっ！」

颯希「あの——エリザベス女王杯、すごかったです」

見かわし、笑う寿々芽と姫香。

寿々芽「美途ちゃん。朝倉オーナー、馬主資格返上したんだって？」

美途「はい。レナーテも引退したから、会社やりながら引退馬協会の運
営に協力するって」

寿々芽「そうか。立派だね。レナはエリ女で燃え尽きちゃった。マリアも引退しちゃったしなあ。あゝあ、ラストランの有馬、わたしが乗ってりやなあ」

姫香「はいはい。寿々芽さんが乗ってりや掛かりまくって四コーナーでズブズブでしたよ」

寿々芽「なに〜」

颯希「でも、ジャパンカップ勝ったブルースキッドの首差二着はやっぱりすごいです」

姫香「ふふふ。ありがとう」

寿々芽「辛いよ、競馬学校の三年間は。今考えてるより、ずっと」

姫香「辞めたいって思う事、何回でもあると思う。覚悟しておいた方がよい」

颯希・美途「——はい」

寿々芽「いつかG I、四人でいつしよに乗ろうね」

姫香「待つてる」

颯希・美途「——はいっ！」

寿々芽「おー、いい返事だ。頑張るんだよ」

姫香「あゝ、おなかすいた〜。うど〜ん。きつねうど〜ん。おにぎり〜。

おこれ〜、寿々芽よおごるのだ〜」

寿々芽「なんでわたしがあなたに朝メシおこなきゃなんないのよ！」

じゃれあうようにしながら調教スタンドに入っていく二人の背中を見つめる颯希と美途。

颯希「かつこええ」

美途「世界で一番の二人だよ」

颯希「いつか、四人で、G I」

美途「うん。きつと」

どちらからともなく手を繋ぐ。その手を強く握り合う二人。

○メインタイトル

〈駒は乙女に頬染めさせてII〉

○東京競馬場・ダートコース

テロップ(以下へT)×三年後・競馬学校卒業生模擬レース

土曜日開催の昼休みに行われる卒業生模擬レース。競馬学校卒

業予定の生徒十人が各々の騎乗馬に乗りゲートインする。6番

の颯希。7番の美途。二人以外は男子。

ゲートが開く。中団に位置する二人。淡々と進むレース。

最後の直線。颯希の馬が抜け出す。美途の馬が追いつがる。残り百メートルで二人の騎乗馬の轡が並ぶ。ゴール手前で美途の馬が颯希の馬を振り切る。

美途、一着でゴールイン。

クールダウンで馬を走らせている美途。颯希がうしろからやってきて。

颯希「やられた〜」

美途「馬がよかつただけだよ」

颯希「ワントー決めてしもうたね」

美途「だね」

颯希「GIはこの逆やから」

美途「ううん。このまんま」

颯希「そうはいくか」

しばらく並走している二人。颯希が手をかざす。美途が手を挙げる。

パァン！ 馬上のハイタッチ。

観客から拍手が送られ続けている。

○栗東トレセン・独身寮・外景(夜)

〈T〉三年後【四月】

○前同・寮内・美途の部屋(夜)

木馬に乗って騎乗練習をしている美途。

真剣なその顔。

ノックの音。気づかない美途。扉を開ける寿々芽。木馬練習を続ける美途をじつと見つめる。

寿々芽「美途ちゃん！」

気づく美途。

美途「寿々芽さん」

寿々芽「部屋の鍵はかけておいた方がいいんじゃない」

美途「……」

寿々芽「ご飯食べに行こうか」

美途「え」

微笑んで見途を見る寿々芽。

○栗東市内の居酒屋『テツ屋』・外景(夜)
暖簾が出ている。

○同・店内(夜)

賑わっている店内。カウンター席に並んで座っている美途と寿々芽。寿々芽の前にビールの中ジョッキ。美途の前ウーロン茶のグラス。

寿々芽「前にも言ったっけ。わたしさ、颯希ちゃんが栗東で、美途ちゃんが美浦だと思ってたんだよね」

美途「海野さんが颯希に『美浦の厩舎に所属しろ』って言ったんです。じやあ、わたしはこちかなって」

寿々芽「親元に置かなかったか。厳しいねえ、牝馬のジョーは」

美途「でも颯希はやっぱりすごい。ここまで七十五勝。根岸ステークスも七夕賞も勝ってるし。GIにも乗ってるし。学校のおかげから騎乗技術ずば抜けてましたもん」

寿々芽「ここまで何勝だっけ、美途ちゃん」

美途「初年度五勝、二年目四勝、今年ここまで一勝の十勝です」

寿々芽「昔の自分を見るようだなあ。焦る？」

美途「……はい、やっぱり」

寿々芽「それでいい。焦れ」

美途「え？」

寿々芽「できた人間なら『焦らなくてもいい』とか言うんだろうけど、わたしはそうじゃないから。焦って焦って焦りまくれ。『必死のPATCH』って言葉知ってる？」

美途「いえ」

寿々芽「関西の人がよく使うんだよ。『必死のPATCH』で頑張ってみな。

最近思うんだ。若いとき、もうちよっと一生懸命だったら、きつと

もつと勝ってたよな。騎乗も、営業も」

美途「『必死のPATCH』……」

寿々芽「エージェント、どうしてるんだっけ」

美途「つけてないです。石村先生がエージェント制度あまりよく思っていないんで」

寿々芽「そっか。じゃあなおさら営業も頑張らないとね」

美途「はい。あ、改めまして高松宮記念優勝、おめでとうございます」
寿々芽「ありがとうございます。GIもう勝てないかもって思ってたからさ、ほっとした」

美途「どんな気分ですか、GI勝つって」

寿々芽「そりゃまあ、最高だよ。あの感じは勝った者にしか分からないよ」

美途「勝った者にしか……寿々芽さん、次の目標は？」

寿々芽「ん？ 次かあ——やっぱりダービー、獲りたいよねえ」

美途「ダービー……」

寿々芽「騎手になったからにはさあ。美途ちゃんだってそうでしょ」

美途「いや、あまりに遠すぎて……」

寿々芽「運命の馬との出会いなんていつあるか分からないんだからさ。

その時のために必死のパッチで頑張る。まあ、それも明日からだ。

今日は食え。ほら、好きなもの頼んでいいよ」

メニュー表を差し出す寿々芽。しばらくそれを見ている美途。

美途「——すみませーん」

手を挙げる美途。従業員が注文を取りにくる。

美途「土手焼き。ちくわチーズフライ。ごほうサラダ。だし巻き卵。あ

と手羽ぎょうざ。それからおにぎり。とりあえず以上で」

寿々芽「ちよっと！ 減量どうなっても知らないよ！」

美途「あー、わたしそれは大丈夫な体なんです。減量気にしないでいいの

だけは颯希に羨ましがられてました」

寿々芽「騎手としていちばんの才能だ、それは」

美途「ですよね〜」

笑いあう二人。

○栗東トレセン・調教コース【二日後】(早朝)

販路コースで調教騎乗の美途。

○同・調教スタンド前(早朝)

騎乗馬を厩務員に引き渡す美途。調教師の北光邦(50)もいる。

光邦「ご苦労さん。しつかり追つてくれたな」

美途「はい——あの、北先生」

光邦「ん？」

美途「あの、あの——この馬、乗せてください」

美途をじつと見つめる光邦。

光邦「前走のヤネは誠やったんやけどな」

美途「あ——」

光邦「天下の館誠に替えて、きみに乗せるのもおもういな」

美途「……すみません」

光邦「謝らんでもええ。そういう姿勢は大事やぞ」

美途「え」

光邦「女性騎手の軽ハンデは魅力や。気にかけてくわ」

美途「はい！ ありがとうございます！」

深く頭を下げる美途。

○同・厩舎地区敷地内

自転車に乗っている美途。

美途「必死のバッチ。必死のバッチ……」

○同・独身寮・駐輪場

自転車を止める美途。

○同・独身寮・食堂

何人かの騎手が朝食を摂っている。

その中の一人、若草雅人(21)の前に座る美途。

美途「若草君」

雅人「朝倉さん。どうしたん？」

美途「若草くんさ、次の日曜、和田厩舎主催で若手の騎手や厩務員集めたカラオケ大会やるって言ってたよね」

雅人「言うてたもなにも誘つたやん。それで断つたやん、朝倉さん」

美途「出るから」

雅人「え？」

美途「だから出るから。それつて和田先生も来るんだよね？」

雅人「当たり前や。主催者なんやから。先生ムード歌謡いうのが好きでなあ。行つたらずつと聞かされんねん。たまらんで」

美途「え、ムード歌謡？」

雅人「ムード歌謡。昔スナックとかでよう唄われてた歌なんやつて。てか

朝倉さん、なんで急に？」

美途「——必死のバッチだから、わたし」

雅人「はあ？」

○同・独身寮・美途の部屋(夜)

スマホの動画サイトでムード歌謡を視聴している美途。繰り返し観て、口ずさんでいく。

○栗東市内のカラオケハウス【六日後】(夜)

新人騎手や若い既務員、調教助手など十数名がソファに座っている。ステージで唄っている調教師の和田学(55)と美途。

美途・学『♪東京でひとつ 銀座でひとつ 若い二人が 初めて会った 本当の恋の物語』

美途・学『♪愛が飛び立つ 北空港』

美途・学『♪ああ 抱きしめて 二人の大阪 ラストダンス』

「ご満悦の学を微笑んで見る美途。

ソファに並んで座っている美途と学。

学「いや、朝倉くんがムード歌謡好きやつたとはなあ」

美途「亡くなった父がカラオケに行くといつも唄ってたんです。それでわたしも覚えて」

学「そうか、君、ご両親亡くしてるんやつたな——よう頑張ってる、この男社会の中、よう頑張ってる思うよ、ほんまに」

美途「ありがとうございます——次『アマン』いきましようよ先生」

学「おっ。ええ歌知ってるがな。おもろい！朝倉くん、君は実におもろい！」

美途「ありがとうございます！」

鼻白んだ顔で二人を見る雅人。

○栗東トレセン・調教コース【二日後】(早朝)

ウッドチップコースで調教騎乗をしている美途。

○同・独身寮・食堂

朝食を摂っている美途の前に雅人が座る。しばらく無言で食事を続ける二人。

雅人「カラオケ、びつくりしたわ」

美途「そう」

雅人「学校のとときのイメージとは違うよなあ」

美途「——和田先生にまたカラオケいっしょに行きましようって言うってよ」

雅人「分かった」

食事を続ける美途。

○阪神競馬場・ダートコース【一週間後】

第二レース発走前。スタート地点へ向かう各馬。後ろから寿々

芽の騎乗馬がやって来て、美途の隣に並ぶ。

寿々芽「和田先生とカラオケでデュエットしたんだって」

美途「はい。『お礼だ』ってこの馬乗せてくれました」

寿々芽「やったじゃん」

美途「でも——」

寿々芽「すつきりしない気分？」

美途「はい。ああいうのは、情けない気持ちもあつたり……」

寿々芽「カラオケほんと好きだもんね、和田先生。実はわたしもそれ

やって和田先生の馬に乗せてもらおうって考えたことある」

美途「寿々芽さんも、ですか」

寿々芽「うん。でも、やらなかった。てか、やれなかった。わたし音痴な

の。かなりの」

美途「音痴、ですか」

寿々芽「そう。やったところで逆効果だからね。だからやめといた」

クククツと笑う美途。

寿々芽「なによお、失礼ねえ」

美途「今度いっしょにカラオケ行きましようよ、寿々芽さん」

寿々芽「調子乗ってんじゃないわよっ」

出走地点へ向かっていく二人の騎乗馬。

× × ×

ゲートが開き各馬がスタートする。

美途「必死のパッチ、必死のパッチ……」

ぶつぶつ呟きながら騎乗する美途。

四コーナーを回って先頭は寿々芽の騎乗馬。中団から抜け出た

美途の馬が追いつがる。寿々芽振り返って。

寿々芽「来たな、抜かさん！」

美途「抜く！」

必死に馬を追う美途。ゴール前五十メートルの地点で、寿々芽の

馬に追いつき、一気に抜き去る。そのままゴールイン。

小さくガッツポーズをする美途。

○同・検量室前

後検量を終えて出てきた美途を学が迎える。

学「ようやくつてくれたー！」

美途「はい、ありがとうございます！ 乗せていただいた先生のおかげですー！」

学「次も頼んだで」

美途「えー！ いいんですかわたしで」

頷く学。マイクを持つふりをして。

学「こっちの方もな」

美途「はい、もちろんですー！」

がっちり握手をする二人。

○石村厩舎・馬房【一か月後】

馬房掃除をしている美途。調教師の石村春樹(52)がやって来る。

春樹「美途」

美途「はい」

春樹「最近よう他の厩舎回つてるらしいな。ええこつちゃ」

美途「はい」

春樹「おれは闇雲にエージェント制度に異を唱えてるわけやない。おまえみみたいなヒヨッコがそんなもんに頼るのはおかしいって思ってるだけや。そうやってボロ掃除した足でいろんな人に会って、きちんと挨拶して、話して、人間関係築いた上で、一頭の馬と巡りあえるんや。その当たり前のことを身に染みこませろ。ええな」

美途「はい」

春樹「正しい道を行くおまえは。自信持つてええ」

美途「はい、ありがとうございます」

馬房を出ていく春樹。その後ろ姿に頭を下げ、掃除に戻る美途。

○美途の騎乗馬獲得の為の営業活動の様子

- ①〈某厩舎事務所〉調教師の孫娘二人に絵本を読んでもやっている美途。
- ②〈某厩舎事務所前〉調教師の妻に頼まれていた買い物を終えて、戻ってくる美途。
- ③〈ボートリング場〉調教師たちとのボートリング大会。ストライクを出した調教師とハイタッチをする美途。
- ④〈卓球場〉調教師と卓球をしている美途。
- ⑤〈プロレス会場〉調教師とプロレス観戦をしている美途。
- ⑥〈ゴルフ場〉第一打を打つ調教師。「ナイスショット」の声をかけるゴルフウェアの美途。
- ⑦〈カラオケハウス〉学と見つめあいデュエットする美途。

○京都競馬場・芝コース【六月】

一着でゴールインする美途の騎乗馬。

○同・検量室前

後検量を終えて出てきた美途が、騎乗馬の調教師と握手。その調教師が去ったところへやってくる光邦。

光邦「おめでとう。ええ騎乗やったな」

美途「ありがとうございます」

光邦「絶対調やな。この勝ちでここまで——」

美途「十五勝です。先生方がいい馬に乗せてくださるおかげです。それだけです」

光邦「謙虚やなあ。でな朝倉、俺からもひとつ頼み事あるんやけどな」

美途「え」

光邦「ここではなんやから、明日昼すぎに、事務所まで来てくれるか」

美途「はい」

光邦「待つてるわ」

光邦、去る。その後ろ姿をしばらく見ている美途。

○京都・KAWACAFE

鴨川添いにあるカフェレストラン。窓際の席に座り、鴨川の流れを見ている

美途。昨日光邦と交わした会話が思い出されてくる。

美途(声)「画家の方が、ですか」

光邦(声)「ああ。その人な、七十二歳の画家や。里見さんって言う。馬

主の赤坂さんが画商やいうことは知ってるな」

美途(声)「はい」

光邦(声)「へ里見さんと赤坂さんは昵懇の仲や。この前赤坂さんが馬主席に里見さんと呼んだときに朝倉のことを見たそうや。そのとき里見さん、朝倉と直接会っていろいろ話をしたいって思ったんやて」

美途(声)「へ——あの、お話を、するだけですよね」

光邦(声)「へもちろんや。俺も会ったことあるけど上品な人や。画壇の重鎮。国から勲章貰ってるほどの立派な絵描きさんや。俺が保証する。赤坂さんからの話しは俺もむげには断れんのか。どうや」

美途(声)「へ——はい、分かりました」

ぼーっと鴨川を見ている美途。

隆三「朝倉美途さん、やね」

立っている里見隆三。

美途「あ、は、はい」

隆三「初めまして。お待たせしてしもうたね。里見隆三です。座ってもええかな」

美途「あ、はい、ど、どうぞ。は、初めまして。朝倉美途です」

向かい合って座る二人。

× × ×

コーヒークップを前に向かい合う二人。

緊張気味の美途だったが、上手く水を向ける隆三の語り口につられ、騎手生活の話などをはじめる美途。表情豊かに聞く隆三の様に気持ちもほぐれていく。

隆三「しかしなんやなあ。間近で見ると、余計に描きたあなってくるなあ」

美途「え」

隆三「美しいよ、きみは。内面の輝きが溢れ出ている」

美途「あの——」

隆三「馬主席からきみを見たとき、本当に光って見えた。きみが6レーズに勝ったとき、ほくは駆け下りた。地下馬道に消える前のきみを見た。馬上から観客に笑顔で手を振るきみは、本当に美しかった」

美途「——」

隆三「きみをモデルに絵を描きたい。それをお願いするために、今日お呼びしたんや」

美途「わたしをモデルに、絵を、ですか」

隆三「騙すようなことは嫌やから最初に言うわ。ぼくはきみの裸を描きたいんや」

美途「！」

隆三「驚かせてしまったね。ぼくは若い頃裸婦画を主に描いていた。ぼくの原点や」

美途「裸婦画——」

隆三「うん。今は風景画中心に描いてる。手慰みに仏画なんかもね。そのぼくがや、きみを見て久々に裸婦画描きたいって思った。どんな女性見ても四十年以上そんなこと思わへんかったぼくがや」

美途「……」

隆三「スケベな爺さんやと思ってくれてええよ。事実その通りや。今の時代、セクハラいうのになるんやろうね、こーういのは。でもぼくは、初恋の人に告白するのと同じ気持ちで、今きみに言葉を伝えている。朝倉美途さん。ぼくはあなたの裸を描きたい。あなたの美しさを描きたいのや」

隆三を見つめる美途。やがて目を伏せる。

隆三「もちろん、お礼はさせてもらう。断つてくれてええ。けど、その返事、今すぐこゝでは返さんとしてほしい」

顔を上げ、隆三を見る美途。

隆三「この話し持ち帰って、一人で考えてみてくれへんか。その上で断つてほしい。きみの気持ちを尊重する。そのときは、これはなかつた話や。しつこく頼むことはないから安心してええ」

美途「——は」

○栗東トレセン・独身寮・女風呂【三日後】(夜)

湯舟に浸かっている美途。目を閉じ、沈思黙考。やがてゆっくりと頭を湯の中に沈めていく——。

美途「ぶあつー」

十五秒ほどして頭を出す美途。

美途「断るー」

風呂場に響く美途の絶叫。

○栗東トレセン・南馬場調教スタンド前【三日後】(早朝)

調教前の馬(デュエルナイフ)に乗っている美途。光邦がいて。

光邦「会ったんか、里見さんと」

美途「はい。楽しくお話させていただきました」

光邦「それだけか？」

美途「はい。それだけです」

光邦「——分かった。そしたらデュエルナイフの攻め馬、しっかり頼むわ。

馬なりに走らせたらええ。赤坂さんの馬や」

美途「赤坂さんの」

光邦「ああ。里見さんに会ってくれたお礼に、攻め馬乗せてやってくれっ

て赤坂さんがな。うちの期待の二歳牡馬や」

○同・ウッドチップコース(早朝)

調教騎乗の美途。驚く。

美途「なに、この馬……」

○同・南馬場調教スタンド前(早朝)

戻ってくる美途と騎乗馬。下馬し、光邦と向き合う美途。

光邦「どうやった」

美途「——加速が強烈です。こんな乗り味の馬、初めてです」

光邦「ああ。逸材や。この馬GIに進められへんかったら、俺はこの仕事

辞めなあかんて思ってる。最初の目標は朝日杯やけどな」

美途「……」

厩務員に曳かれ帰っていくデュエルナイフ。その後ろを光邦も。

美途「北先生」

振り返る光邦。

美途「デュエルナイフ、鞍上は」

光邦「アルヌールかロバートソンに頼むつもりや。朝倉、さすがにおまえにはこの馬は家賃が高いわ。攻め馬で来ただけでもありがたいと思っ
つてくれや」

去っていく光邦とデュエルナイフをじつと見ている美途。

○隆三の家の前【二日後】(夜)

豪邸。玄関前に立っている美途。

○同・中・隆三のアトリエ(夜)

ソファに座り向かい合っている美途と隆三。

隆三「心変わりの理由を訊くのは、野暮やな」

美途「——」

隆三「ほんまに、描かせてくれるんやね」

美途「電話でお話したとおり、条件があります」

隆三「うん」

美途「わたしが里見さんの絵のモデルになったこと、誰にも言わないでく

ださい」

隆三「もちろんや」

美途「絵は、誰にも見せないでください。里見さんだけのものにしてく

ださい」

隆三「最初からそのつもりや。誰にも見せることとはなら」

美途「それから」

隆三「なんや。遠慮のう言うてみ」

美途「北調教師の厩舎にデュエルナイフという二歳馬がいます。ご存じで

しょうか」

隆三「ご存じもなにも、ぼくが名付け親や」

美途「え」

隆三「馬主の赤坂は若い時ぼくの書生——マネージャー兼秘書やったん

や。持ち馬の名前付けてくれてよう頼みにきよる」

見つめあう美途と隆三。

隆三「乗りたいやろ、デュエルナイフに」

美途「——はい」

隆三「ぼくの言うことは聞きよるよ、赤坂は。赤坂に言うとか。強う

に言うとか。それでええな」

美途「——はい」

隆三「よしや。じゃあごちからも条件。ぼくの言うポーズを素直にと

りなさい」

美途「——」

隆三「足開けとは言わんから安心し。まっすぐ立つてもらうだけや。け

ど、全部脱いでもらうよ、ええね」

俯く美途。やがて顔を上げ隆三をまっすぐ見て、きつぱりと。

美途「はい」

隆三「うん、そしたら隣の部屋で裸になって戻ってきなさい」

美途「はい」

立ち上がる美途。

○アトリエの隣の小部屋。

深呼吸する美途。

美途「——デュエルナイフ、朝日杯、皐月賞——ダービー……」

服を脱ぎ始める美途。

○隆三のアトリエ(夜)

全裸になり、戻ってくる美途。胸と股間を手で隠している。

隆三と美途、対峙する。

隆三「手を降ろして、髪を肩の前に垂らしなさい」

美途「——はい」

言われたとおりにする美途。ほうつと息をつく隆三。

隆三「ヴィーナスの美を持った女性は何人も描いた。けどワルキューレの

美しさを持った女性には初めて会った。ほくの目はまちがってなかつ

た」

美途「——」

隆三「じゃあ描くよ、ええね」

美途「はい」

隆三「大事な体や。風邪ひかせるわけにいかん。寒くなったら言うんや

ぞ」

美途「はい」

美途、少し笑む。

○栗東トレセン・調教コース【四日後】(早朝)

ウッドチップコース、デュエルナイフに調教騎乗の美途。

○同・調教スタンド前(早朝)

戻ってくる美途。下馬し、厩務員にデュエルナイフを引き渡す。去

つていく同馬。光邦が近寄る。対峙する二人。

光邦「どうやった」

美途「やっぱり最高です。今までに乗ったどんな馬よりも」

光邦「里見さんに頼んだんやな」

美途「はい。せつかく縁を結ばさせていただいたので」

光邦「なるほどな」

美途「どう思われてもかまいません」

光邦「いや、見上げたプロ根性や」

じつと美途を見る光邦。その目を逸らさない美途。

光邦「馬主の強い意向には逆らえん。けどな朝倉、主戦と決まったわけやないぞ。新馬戦は任せる。けど負けたら替える、次はない。それは赤坂さんにも了承してもらった。ええな」

美途「はい。分かっています。この馬で新馬戦勝てなかつたら、騎手辞める覚悟です」

光邦「——おまえがそこまでガッツのある乗り役やとは思わなかったわ」
光邦、ニヤツと笑って。

○阪神競馬場・芝コース

〈T〉9月・阪神5R・新馬戦・一六〇〇m(芝・良)

ゲートインしているデュエルナイフ。その首を鞍上の美途が優しく叩く。

美途「離すもんか」

ゲートが開く。揃ったきれいなスタート。中団に位置するデュエルナイフ。

レースは淡々と進み、第4コーナー。

ゴーサインを出す美途。馬群から抜け出す同馬。一気に他馬を置き去りにする。

直線に入り二番手以下をなおも突き放す。どよめきが起きる。

八馬身差の圧勝劇。

○京都・祇園の高級クラブ『ガーネット』(夜)

美途の祝勝会が行われている。参加者は美途、光邦、隆三、赤坂の四人。それぞれの隣にホステスが座っている。

きらびやかな雰囲気戸惑い気味の美途。

赤坂「こういうところは初めてか、朝倉くん」

美途「はい」

ママ・祐未「惚れ惚れする。女の子で騎手やなんて。お年は？」

美途「二十一です」

祐未「うちの娘といっしょやん。親の稼ぎで遊び回ってるわ。爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいわあ」

隆三「強いよ、この子は。なあ、北君」

光邦「はい。礼儀もきちつとします。石村調教師の指導がよほどよかったです。そやろ、朝倉」

美途「はい。石村先生には本当に感謝しています。もっと上手くなって、ご恩返しをしたいです」

祐未「ええこと言わはるわ。いっぺんにファンになってしまった。今度馬券買うわね」

美途「ありがとうございます」

赤坂「デュエルナイフ、次も頼んだよ。異存はないですね、北さん」

光邦「はい。今日の騎乗を見て、替える理由は見当たりません」

美途「あの、北先生」

光邦「ん、なんや」

美途「ありがとうございます。嬉しいです。でも、ミスしたら遠慮なく替えてください。デュエルナイフを離したくはありません。でも、甘い気持ちで乗りたくもありません」

祐未「若いホステスたちにあんたらもちょうとは見習い。これがプロの姿勢や」

隆三「朝倉くん。きみは本当に美しいよ」

微笑んで美途を見る隆三。美途、チラッと隆三を見る。すぐに目を逸らし、僅かにカクテルグラスに唇をつける。

○京都競馬場・芝コース

〈T〉10月・京都9R・もみじステークス・一四〇〇m(芝・良)

出走しているデュエルナイフ。最後の直線。後続を大きく引き離す同馬。

またも大差をつけてのゴールイン。

(F・O)

○美浦トレセン・独身寮・外景(夜)

○同・一階フロア(夜)

テレビ前のソファに座ってスポーツ新聞を読んでいる颯希。紙面は大きくデュエルナイフの二連勝を取り上げている。後ろから若手騎手、工藤貴康(26)がやってきて紙面をのぞき込む。

貴康「デュエルナイフ、その切れ味世代最強!」か。(颯希の前に座り)次、ぶつかるといふんだろ、デイリー杯で海野のイチノアレックスと」

颯希「はい」

貴康「関西初遠征か、楽しみ?」

颯希「ですね。美途と同じレースに乗るのは、卒業前の模擬レース以来
やから」

貴康「急激に勝ち鞍伸ばしてきたな、朝倉」

颯希「いつかゾーンに入ると思っていました。あんなに頑張った子、いま
せんから」

貴康「努力が花開いたってか」

颯希「はい」

貴康「それほどじゃないみたいだけど」

颯希「え」

貴康「営業、ガンガンかけてるらしいよ彼女。休みの日はテキの趣味に
お付き合いです、こ機嫌とって、こ褒美にいい馬乗せてもらってるって
さ」

颯希「——それかて、あの子の努力のうちです。なにも悪いことやとは
思いません」

貴康「だね。そこでどどまっつたらいいけど」

颯希「どういう、ことですか」

貴康「デエルナイフほどの良血の素質馬が、なぜ一流とはいえない朝倉
のお手馬になったか。馬主はどうして彼女を乗せるよう北調教師に
言ったのか」

立ち上がる貴康。

貴康「枕営業やったのじゃないかって、もっばらの噂。ネット上でも、既舎
関係者の間でも」

去っていく貴康。しばらく固まったようになっている颯希。新聞を
置き、立ち上がる。貴康を追いかけていく。

颯希「待ちや——おい！ 待て！」

振り返る貴康を睨みつける颯希。

颯希「なに言うた……今なに言うたんや！」

貴康「海野、なに怒ってんだよ」

颯希「美途は、美途はな。四十度の熱があつても授業休まへんかった。休
みの日もずっと走って、トレーニングしてきた。血尿出しても馬に乗っ
てきたんや！」

貴康に掴みかかる颯希。

貴康「うわっ！」

颯希「ふざけんな！ おまえ！ ふざけんなよ！ もう一回言うてみい
や！ おい！ なに言うたんや、今！」

フロアに居た騎手たちが止めに入り二人を引き離す。姫香も。
姫香「颯希ちゃん！ やめなさい！ 落ち着いて！」

貴康「海野！ おまえ、海野さんの娘だからっていい気になってんじゃないぞー！」

颯希「うるさいわ、ボケ！ 謝れ！ 美途に謝れっ！」

泣きながら貴康にくつてかかる颯希。必死で制止する姫香。

× × ×

ソファに隣り合わせで座っている颯希と姫香。

姫香「そうかあ。そんなこと言ったか、クドタカ。バカだからなあ、あいつ。去年東京大賞典勝つて調子乗つてんだよ。寮長としてわたしがきつちりシメておく」

颯希「すみません……」

姫香「でも、二人本当に仲いいんだね」

颯希「正直センスはなかったです、美途。でも努力の天才です。あの子の努力が十なら、わたしのそれなんか一にも満たない——美途は、わたしの憧れです」

姫香「ふふっ」

颯希「？」

姫香「いや、うらやましいなあって思って。わたし、同級生に女の子いなかったもん」

机の上に置かれたスポーツ紙の美途の記事をじつと見つめる颯希。

○栗東トレセン・岡島厩舎事務所・内【一週間後】(夕方)

中学生女子と並んで座り、彼女に数学を教えている美途。

○同・岡島厩舎事務所・入口(夕方)

美途「失礼します」

出てくる美途。颯希が笑って立っている。

颯希「石村先生に訊いてきた。終わった？ カテキョ——久しぶり」

美途「うん」

微笑み合う二人。

○同・路上(夕方)

並んで歩く二人。

美途「岡島先生から頼まれたの。娘さん学校済んだら事務所に来させ

るから勉強みてやってくれって」

颯希「そっかー。美途、学科ダントツやったもんね」

美途「実技はいつもビリケツだった」

颯希「でも、いちばん頑張った。模擬レース一着。大泉教官あの後号泣し

てたやん」朝倉の成長は、俺の誇りだ』いうて」

美途「そんなことあったね」

颯希「岡島先生、いい馬に乗せてくれそう？」

美途「さあ、どうだろう」

颯希「相変わらず頑張り屋やなあ、美途は。すごいよ」

美途「——本当に、そう思ってくれる？」

颯希「え？」

立ち止まる二人。

美途「最近『鬼営業の朝倉』なんか言われちゃってさ。まあ、間違いじゃないんだけど」

颯希「それも全部ええ馬に乗るためにやってることやろ。そんなん努力してない人間のやつかみや。ほっといたらええんや。言わせたいやつには言わせとき」

美途「——うん。ありがとう颯希」

颯希「なあ、久々にこの調教スタンド行ってみたい」

美途「え——うん。行こうか。にしても向こう行って大分なるのに関西弁

全開だね、颯希は」

颯希「うるさいわ！ あんたかていつまで経っても東京の言葉喋ってるやないの！」

笑いながら調教スタンドに向かう二人。

○同・調教スタンド四階・ペランダ(夕方)

並んで立ち、夕暮れの調教コースを眺める二人。

颯希「なあ、覚えている？ 卒業前にここから、寿々芽さんと姫香さんの調教見たの」

美途「うん。覚えてるよ。あの後二人で挨拶に行つて。寿々芽さん』いつ

か四人でGⅠ乗ろうね』って」

颯希「もうすぐやね、その日も。あと何勝でGⅠ乗れるんやった？」

美途「五勝」

颯希「そうか。ほんまに一気に勝ち鞍伸ばしてきたなあ。明日のレース、もちろん全力で乗るけど、正直美途の馬に勝つのはちょっとなあ——

なあ、美途」

美途「え？」

颯希「そのデュエルナイフのことで——いや、やめやめ。なんでもない」

美途「——言つて。お願い」

颯希「いやあ、しょうもない噂やねん……あかんあかん。訊くのもアホくさいわ。ごめんな。寒くなってきたな。帰ろうや。ちよと早いけど調整ルーム入ろ」

ベランダを出かける颯希。調教コースを見つめたままその場を動

かない美途。

颯希「振り返つて）美途？」

美途「知ってる、その噂」

颯希「——ごめんな。訊いたわたしがアホや」

美途、颯希に向き直る。

美途「してない」

颯希「うん。分かってる」

美途「枕営業は、してない」

颯希「え——『枕営業は』って？」

美途「——」

美途をじつと見つめる颯希。俯く美途。

颯希「言うて、美途」

美途「——赤坂オーナーの、師匠みたいな人で、里見さんって人がいる。

七十二歳の画家」

颯希「画家」

美途「北先生通じて里見さんに会つて。そのとき、里見さんわたしの絵を描きたいつて言つて。でも、最初は断つたの。その後、わたし、デュエルナイフの攻め馬して、そしたら、あの馬凄くて。今まで乗つたことない感覚で。だから、どうしてもあの馬に乗りたくて……」

颯希「——だから、その人に、頼んだん？」

小さく頷く美途。

颯希「絵を描かせるから、デュエルナイフに乗せろつて？」

小さく頷く美途。

颯希「——どんな絵？」

答えない美途。

颯希「どんな絵？」

答えない美途。

颯希「どんな絵か訊いてるやん！ 答えてえや！」

美途「——裸の絵」

颯希「——描かせたん、裸、その人に」

俯いたまま小さく頷く美途。美途を見つめたままの颯希。重く

長い沈黙。

颯希「汚あ。信じられへん。なにそれ」

美途「……」

颯希「体触らせてないけど枕営業といつしよやん、そんなん。噂はほんま

やってんや」

美途「颯希い……」

颯希「気安く名前呼びなや！」

美途「……」

颯希「なあ、あんた『まだ』やんね、わたしもそうやけどさ。遊んでる時間なんかないもんね。それやのに七十二歳のエロジジイに裸見せたんや。笑うてしまうわ」

美途、涙をこぼす。

颯希「今泣くのやったら、最初からそんなことやりなや！ あんたがそんなことする子やなんて思わへんかったわ——この調整ルーム入るのやめとくわ。京都競馬場行くわ。あんたと同じ空気吸いたくない」

立ち去りかける颯希。

美途「乗りたかった！ デュエルナイフにどうしても乗りたかった！ あの

馬なら、G I 乗れるつて。颯希と——寿々芽さんや姫香さんといっし

よにG I 乗れるつて。だから、だから——」

颯希「それでいつしよのレースに乗ってわたしが、寿々芽さんや姫香さんが、喜ぶとでも思ったんか！ そんな汚いことして馬手に入れたあんたと同じG I に乗って——」

美途「ごめん、ごめんさ……」

颯希「なにに、だれに謝ってるのん——絶交や。二度と話しかけてこんといて。安心し、誰にも言わんといたるから。言うたら自分まで汚い人間になつてしまえうや」

颯希、ペランダから去る。

残される美途。蹲る。泣く。

○同・路上(夕方)

力なく歩いていく美途。後ろから自転車ですつてくる寿々芽。美

途を追いぬいてから停まり、振り向いて。

寿々芽「美途ちゃん——あれ、颯希ちゃんといつしよだったのじゃないの？」

美途「はあ、そうだったんですけど」

力なく俯く美途。

寿々芽「どうしたのよ。昨日まで颯希ちゃん来るのすごく楽しみにしてたじゃない」

美途「そうだったんですけど……そうだったんですけどお……」

寿々芽「え、美途ちゃん」

美途の零す涙が路上にぼたぼたと落ちていく。

○ファミリーストラン・店内(夜)

テーブル席に向かい合っている美途と寿々芽。

寿々芽「う〜ん、そっかあ」

美途「軽蔑、ですよ、寿々芽さんも」

寿々芽「ううん、そんなことないよ。見上げたプロ根性だっと思う。ただ、やり方がちよつと下手だったかな」

美途「下手」

寿々芽「うん。わたしだったらその画家の人に

『とにかく先に一回乗せてください。勝つても負けても裸描かせてあげますから』って、その後『裸描かせろって言うてきたことマスコミにはらしますよ』って脅して、デュエルナイフお手馬にしちゃう」

美途「——」

寿々芽「なんてね。当事者じゃないから言えることだよ。そうか。そうか。うまでして乗りたい馬だったか」

美途「はい」

美途の額にデコピンをする寿々芽。

美途「痛っ」

寿々芽「はい、これで終わり。ヌードモデルになっていい馬手にしたのは確かにやりすぎって言われても仕方ない。けど、やってしまったことを後悔しちゃだめ。ふっきらなきやだめよ」

美途「え」

寿々芽「颯希ちゃんのこと。競馬学校るときはいろいろ女二人で乗り切ってきたのかもしれないけど、今はお互いプロなのよ。仲良しこよしでどうするの。『悔しかったらおまえもそれくらいの手を使って強い馬、

手にしてみろ」くらいの気持ちにならなきゃ」

美途「颯希を、ぶっさる……」

寿々芽「成績で負けてるあの子に勝ちたいんですよ。GIでも勝負できると思ったから裸晒してまでデュエルナイフお手馬にしたんですよ。一線は超えなかった、その自分を信じてあげなさい——わたしは、認めてあげるから」

美途「寿々芽さん」

寿々芽「明日のデイリー杯で、颯希ちゃんにデュエルナイフの力を見せてやってやるの。それがプロよ」

じつと見つめあう美途と寿々芽。やがて美途、深く頷く。

○京都競馬場・パドック【翌日】

小雨が降っている。

デュエルナイフに乗り最終周回をしている美途。

イチノアレックスに乗り最終周回をしている颯希。

○同・出走地点へ

大きく離れ、出走地点へ向かう美途、颯希。

○同・芝コース・スタート地点

〈T〉11月 京都1R デイリー杯二歳ステークス 一六〇〇m
(芝・稍重)

出走。先団のイチノアレックス。デュエルナイフは後方待機。淡々とレースが進む。

最後の直線に入る。イチノアレックスが抜け出す。

颯希「よしっ」

その時美途が鞭を入れる。馬衝(ハミ)を取るデュエルナイフ。一気の加速。直線途中で並ぶ間もなくイチノアレックスを抜き去る。

颯希「えう……」

二着馬に五馬身の差をつけ勝利するデュエルナイフ。颯希のイチノアレックスは五着。

○同・検量室

検量後で他騎手から握手攻めにあっている美途。やがて二人が擦れ違う。

美途「朝日杯——GI先に取るから」
颯希「！」

美途「いくらでも嫌って、いくらでも軽蔑したらいいよ」

勝利騎手インタビュールに向かう美途の背中をじつと見る颯希。

○東京競馬場【一か月後】

〈T〉12月 中山10R 市川ステークス一八〇〇m(ダート・良)
レース中の颯希。最後の直線で大きく斜行。不利を受ける他馬。
七着でゴールインする颯希の馬。

電光掲示板に審議の赤ランプが灯り、颯希の馬の斜行が審議対象となっていることを場内アナウンスが告げる。

〈T〉【海野颯希、四日間の騎乗停止・朝日杯フューチュリティステークスは騎乗不可】

○阪神競馬場

〈T〉阪神11R 朝日杯フューチュリティステークス(GI)一六〇

〇m(芝・外・良)

ゲートインしているデュエルナイフ。鞍上の美途。

ゲートが開く。後続に位置するデュエルナイフ。最終コーナーを回り抜け出す同馬。

ごぼう抜きでそのまま他馬を一気に突き放す。二着馬に六馬身の差をつける圧勝で勝利する。ガッツポーズの美途。

○同・検量室前

美途の勝利者インタビューの様子。

アナウンサー(以下・アナ)「朝日杯フューチュリティステークスをデュエルナイフで制した朝倉美途騎手です。おめでとうございます！」
美途「ありがとうございます！」

アナ「今のお気持ちを聞かせてください」

美途「はい。素直に嬉しいです。GIを勝つのは夢だったので」

アナ「圧勝劇でしたね」

美途「はい。最後の直線に入って手応えがどんどんよくなる感じで。本当に凄い馬です」

アナ「早坂姫香騎手、橘川寿々芽騎手に続き女性騎手として三人目のGIジョッキーとなりました。そのことについては」

美途「そうですね。後に続けたいと思っていたので嬉しいですが。でもまだまだ差があると思ってるので、頑張って追いつきたいです。あの、ひとこといいでしょうか」

アナ「はい、なんででしょう」

美途「——わたしがデユエルナイフに騎乗することになったことについて、SNSなどでいろんな噂が取りざたされているのは、知っています。最初に機会を得て調教に乗せていただいたとき、絶対にこの馬に乗り続けたいと思い、北先生、赤坂オーナー、そしてデユエルナイフの名付け親である里見画伯にお願いしました。一生懸命お願いしました。結果、乗せていただくことになりました。それがすべてです」

アナ「——心無い噂を払拭する勝利でしたよ」

美途「そう言っていたければ嬉しいです。これからも頑張りますので応援よろしくお願いします！」

涙ぐみながら、笑顔を見せる美途。隆三、光邦、赤坂らが祝福に駆けよる様子が画面に映って。

○美浦トレセン・独身寮・颯希の部屋

テレビ画面に映る美途の勝利者インタビューを座ってじっと見ている颯希。

颯希「どうやって『一生懸命お願い』したかちゃんと見えや」

リモコンのスイッチを押し、テレビを消す颯希。

○東京競馬場【一か月後】

〈T〉一月 東京9R招福ステークス一八〇〇m(ダート・稍重)

直線で抜け出しかける颯希の騎乗馬。

並走していた馬が大きくヨレ、颯希の馬にぶつかると。

颯希「うわっ！」

あわや落馬しそうになる颯希。騎乗馬もそれまでの勢いをなくし、失速。後続馬群に追い抜かれていく。

○同・検量室

採決室から出てきた、颯希の馬に不利を与えた新人騎手Aの

元へ詰め寄る颯希。

颯希「なんなんあんた！ 今の騎乗なによ！」

A「す、すみません」

Aにつめよる颯希。

颯希「女や思つてなめてんの！ 競馬学校からやりなおせ！」

Aの頭をはたこうと手を振り上げる颯希。後ろからその手を掴まれる。止めたのは

ベテラン騎手猿渡広道(49)

広道「学校からやり直すのはおまえだよ、海野。また騎乗停止になりたいのか」

颯希「……」

広道「おまえが最近勝ち鞍から見放されてる理由がよく分かった。心根の問題だよ」

広道を振り切るように検量室を出ていく颯希。

○美浦トレセン・独身寮・颯希の部屋【一週間後】(夜)

横になってポーツとテレビを見ている颯希。スポーツニュースが引退したかつての重賞馬、葦毛馬ハヤテサクラコの特集を放送している。

颯希「サクラコだ……」

(映像と共にテレビナレーション)「かつて重賞チューリップ賞、阪神牝馬ステークスを制し、桜花賞も三着と健闘したハヤテサクラコは今、瀬戸内海の稲島という小島の神社で繋養され神馬となっています。宮司さん始め島の人たちの愛を受けて生きるこの馬の一日を追いました——」

テレビ画面を見つめる颯希。幼い頃のハヤテサクラコとの邂逅が思い出されてくる。

○〈颯希の回想〉

〈T>12年前、チューリップ賞。一着でゴールするハヤテサクラコ。

鞍上は颯希の父、穰一。

× × ×

勝利馬口取り式。その写真撮影風景。十歳の颯希も関係者と共に写真に収まる。

颯希、鞍上の父を見上げて。

颯希「お父さん」

穰一「ん、なんや」

颯希「わたし、サクラコ好きや。今までお父さんが乗った馬の中で、一

番好きや。一番きれいな馬や」

穰一「そうか。お父さんもサクラコのこと大好きやで」

颯希「桜花賞、獲れるよね、サクラコ」

穰一「当たり前や。牝馬三冠、もらったで」

颯希「やった」

穰一「顔、触ったれ」

颯希「うん」

ハヤテサクラコの鼻づらを優しく撫でる颯希。されるままになつて
いる同馬。

颯希「お父さん。わたしやっぱり騎手になる。騎手になつてサクラコみた
いな馬に乗るんや」

穰一「また始まったかあ」

颯希「ほんまやで！ほんまのほんまに騎手になるんや！今日ほんま
に決めたんや！」

ハヤテサクラコをじつと見る颯希。同馬も颯希を見つめ返して。

○美浦トレセン・独身寮・颯希の部屋にもどつて(夜)

颯希「なにが牝馬三冠や。オークスなんかボロ負けやったやん」

大晦日、美麗に着飾られ島の道を闊歩するハヤテサクラコ。そ
の様子が映るテレビ画面を見続ける颯希。

○瀬戸内海を進む小型フェリー【一週間後】

○同・そのデッキ

手すりによりかかり穏やかな海を見ている颯希。稲島が遠く見
えてくる。

○着岸するフェリー

タラップが着けられ降りてくる乗客たち。颯希も降りる。

○島の小路

スマホに映る島の地図を見つ歩いていく颯希。

○稲島神社・前

鳥居の前に立つ颯希。鳥居をくぐり歩いていく。

○同・本殿

本殿の前に立つ颯希。

颯希「どこだろう」

その時本殿奥の方から馬の嘶きが聞こえる。

颯希「あ」

本殿奥へと進んでいく颯希。

○ハヤテサクラコの厩の前

ハヤテサクラコが厩の中で立っている。

近づき、同馬の前に立つ颯希。

颯希「久しぶり、サクラコ」

颯希をじつと見つめる同馬。

颯希「覚えてる？ 元気そうやね」

ハヤテサクラコの鼻づらを撫でようと

手を伸ばす颯希。そのとき。

真央「ちよつと待ってー」

驚き振り返る颯希。少し離れたところに、ツナギの作業服を着

た少女、木崎真央（14）と巫女の衣装を着た少女、麻生泉美

（14）が立っている。

泉美「ハヤテサクラコは神馬です。本来なら斎戒沐浴してから接しない

といけないような馬です——手水舎で手を洗い、口をゆすがれまし

たか？」

首を横に振る颯希。

泉美「では、もう一度鳥居をくぐるところからやり直してください。海

野颯希騎手」

驚き泉美を見る颯希。にっこりと笑う

泉美。じつと颯希を見ている真央。

泉美「今から散歩の時間です。ついでにいられますか」

頷く颯希。

○島の道

ハヤテサクラコの手綱を曳いている真央。その少し後ろを歩く颯

希と泉美。

○砂浜

砂浜に降り立つ二人とハヤテサクラコ。

真央が同馬を歩かせている。

泉美「サクラコはここを散歩するのが大好きです。現役時代ダートコー
スは走ったことなかったのに」

颯希「競馬のこと、詳しいんやね」

泉美「お父さんが競馬が好きで。小一の頃から一緒に予想してます。わ
たしの予想、よく当たるんですよ。海野さんならみの万馬券、お父さ
んに取らせたこともあります。『競馬・勝利の方程式』は毎号買ってま
す」

颯希「いくつ？」

泉美「十四、中二です」

颯希「あの子も？ テレビに出てたよね」

泉美「はい。真央とは保育園の頃からいつもいっしょです。むかしから動
物が大好きで、サクラコがここに来てから、毎日世話してくれています」
颯希「いつもその恰好してるん？」

泉美「はい。学校から帰ったら。なんか落ち着くんですよ、これ着る
と」

颯希「そっか。大好きなんやね二人とも、サクラコのこと」

泉美「海野さんも、そうでしょ」

颯希「え？」

泉美「そやから、久しぶりにサクラコに会いに来た。飛行機使って、日帰
りで。でしょ」

颯希「——テレビ観て、どうしても会いたくなってしもうてね」

泉美「悔しいですか、朝倉騎手に先にGI勝たれて」

颯希「え——」

泉美「読みました『方程式』で。仲悪くなっちゃったんですよ、朝倉騎手
と」

颯希「……」

泉美「また仲良くなれたらええですね」

颯希「え——それは、もう無理やわ」

泉美「わたしもこれから真央と仲悪くなったりすることあるんかな—
—なんかそんな絶対いややわ」

颯希「……」

泉美「そっや。サクラコに一頭だけ産駒がいるの知ってます？」

颯希「え？ そうなん？」

泉美「テレビじゃ言っただけでなかったですもんね。現在三歳牡馬のハイデユク。五年連続不受胎だったサクラコが繁殖牝馬最終年に産んだ馬です。サクラコの意地の結晶ですね」

颯希「ハイデユク——知らない」

泉美「だめですわねえ。ここまで三戦勝ちなし。でも、素質はあると思うんやけどなあ。もっと短いところ使った方がいいと思いますよあの馬。マイル戦で勝負しないと」

颯希「泉美ちゃん」

泉美「はい」

颯希「なにもん、あなた？」

泉美「え、サクラコのが大好きで、グリーンチャンネルで競馬観てるただの中学二年女子ですよ——」つて、変かなやっぱり、わたしつてば。あはは」

真央がハヤテサクラコを曳いて戻ってくる。まっすぐ颯希を見て。真央「泉美は平安時代から続く稲島神社の巫女。神様の使いです」
微笑んでいる泉美。ハヤテサクラコが嘶く。颯希、海をじつと見つめて。

○美浦トレセン・厩舎地区【一週間後】

厩舎に挟まれた道を歩いていく颯希。

○同・垣内厩舎・事務所前

事務所に入っていく颯希。事務机に座ってスマホで話をしている調教師、垣内力哉（50）。電話を終え、颯希と向き合う。

力哉「よう、問題騎手」

颯希「——」

力哉「ははは、すまんすまん。まあ座れ」

颯希「はい、失礼します」

テーブルを挟み向かい合って座る二人。

力哉「で、なんだ。会って話したいことってのは」

颯希「はい——先生のとこにハイデユクつていう三歳馬がいますよね」
力哉「ああ。いるよ。残念ながらここまで着にも来ず三戦ゼロ勝——それが？」

颯希「先生。ワタシをハイデユクに乗せてください」

力哉「珍しいな、おまえが自分から乗せてくれたってやつてくるなんてよ」
颯希「ハイデユク、次戦の鞍上は」

力哉「いや、まだ決めてない」

颯希「お願いします」

深々と頭を下げる颯希。

力哉「一回も跨ってないのになんで頭下げてまで乗りたいって思うんだ。それも未勝利馬だ。おとつあんが乗ってた馬の子供だから乗ってみたいのか」

颯希「いえ。わたし、ハヤテサクラコがチューリップ賞勝つたのを見て本気で騎手になるって決心したんです。だから、あの馬の子供で、騎手としての気持ち、切り替えたいんです」

力哉「ロンチストだな、おまえは」

颯希「ダメでしょうか」

力哉「最近はみんなエージエント頼みで、わざわざ足運んで頭下げて乗せてくれていう乗り役も少なくなってきたよなあ」

颯希「——わたしもそうでした」

力哉「下卑た噂もついて回ってるが、関西の朝倉美途は立派なものだと思ってるよ、俺は」

力哉「……」

力哉「おまえの気持ちを買ってやる。馬主さんには言うておく。明日の攻め馬から頼んだぞ。だけど下手こいたら次はないぞ」

颯希「はいっ！」

力哉「目が違ってきたな海野」

颯希「はい？」

力哉「ちよつと前まで魚の腐ったような目をしてたよ、おまえは」

颯希、静かに視線をテーブルの上に落として。

○美浦トレセン・南馬場・調教コース(早朝)

ウッドチップコース、葦毛馬ハイデユクの調教をしている颯希。勢いのある同馬の走り。

○同・調教スタンド前(早朝)

力哉が待っている。ハイデユクから降りる颯希。厩務員に同馬を引き渡す。

力哉「どうだった」

颯希「なんでこの馬が勝ち上がれないでいるのか分かりません。終いの足も際立ってます。性格も素直で乗りやすいし……」

力哉「俺のミスなんだよ」

颯希「え」

力哉「ここまで三戦、あの馬に千八と二千を走らせた俺のミス。親父のマトハリマオが春天とステイヤーズステークス勝つてから長いところ走らせてみたんだけどな。おっかさんの血に賭けてみるよ。次戦は千六だ。マイルで勝負する」

颯希「——泉美ちゃんが言ったとおりだ」

力哉「ん？ なんだって」

颯希「いえ。先生、わたしもそう思います」

力哉「そうか。乗ってそう感じたか」

颯希「ええ。それに、競馬の神様がそう言ってるみたいですよ」

力哉「はあー？——おい海野。おまえなんか変な宗教入ったのか？」

颯希「いややなあ、そんなわけないやないですか。変な噂流さないでくださいよ」

微笑む颯希を不思議そうな目で見る力哉。

○中山競馬場・芝コース【二週間後】

発走地点へ向かう各馬。ハイデューク鞍上の颯希に同じレースに乗る

広道が声をかける。

広道「海野」

颯希「猿渡さん——あの、この前はありがとうございました。あのままやと、わたし」

広道「俺も不利受けた新人騎手に同じことやりかけたことがある。札幌だったな。おやしさんに止められたんだよ。あれがなければ俺はどうなってただろうな。変な縁だな」

颯希「——はい」

× × ×

ゲートインしている各馬

〈T〉中山・5R三歳末勝利一六〇〇m(芝・外)

発走。スタートダッシュを決めるハイデューク。好位置でレースを進める。

4コーナーを回り最後の直線、一気に抜け出すハイデューク。後続に大きく差をつけての勝利。

颯希「いける！」

○同・検量室前

ハイデユクから下馬した颯希のところにやってくる力哉。

力哉「やったな、海野！」

颯希「はい！先生、ハイデユクはハヤテサクラコの意地の結晶です！」

力哉「競馬の神様がそう言ってたか？」

颯希「はい！」

がちり握手をする二人。

〈T〉ハイデユクは翌月の次戦も勝利。初の重賞・ファルコンステークスに駒を進めた。

○京都競馬場・芝コース

〈T〉二月・11R きさらぎ賞・一八〇〇m(芝・外・良)

ゲートインしているデュエルナイフと

鞍上の美途。

発走。中団に位置しているデュエルナイフ。最後の直線に入り進出を開始。抜け出しかけるが、残り二百メートルを切ったあたりで一気に失速。

美途「ええうー？」

ズルズルと後退していくデュエルナイフ。十着でゴールする同馬。

美途「なんで……」

鞍上で動揺している美途。

○北厩舎・事務所【翌日】

テーブルを挟み向かい合って座っている美途と光邦。

光邦「やっぱりだったか」

美途「え？」

光邦「デュエルナイフの母父はマイルチャンピオンシップ連覇したミカノイーグル。それもあつてデビュー戦からここまで千六ばかり走らせてきた。あの馬自身の能力で長いところも乗り切ってくれると踏んでたが、無理だったな」

美途「……」

光邦「残り二百切つての手応え、どうやった」

美途「ガクンっていう感じで落ちました。馬自身が戸惑ってるみたいだし

た」

光邦「そうか——朝倉、デュエルナイフはマイラーや。生粋のな。千六超えたら三流以下の馬や」

美途「生粋のマイラー……」

光邦「ああ、マイル戦勝つために生まれてきたような馬や。目標変更や。皐月賞には行かん。ここからはNHKマイルカップを目指す。ええな」

美途「マイルカップ……あの先生、ダービーは」

光邦「あの馬に二四〇〇走らせて、最下位で歩くようにゴールさせたいか、おまえ」

美途「……それは」

光邦「ダービーに乗りたのおまえの気持ちはよう分かる。けどな、調教師として勝てる見込みのないレースを走らせるわけにはいかん」

美途「はい……」

光邦「マイルカップなら勝てる。朝日杯で分かったやろ、同世代で千六走らせてデュエルナイフに勝てる馬がいると思うか？」

美途「いえ」

光邦「その状況は今も変わつてない。マイルカップ勝ったら次は安田記念や」

美途「安田記念」

光邦「ああ。上の世代のマイラーと対決や。十分勝負できるやろ。おれは安田記念っていうのはGIの中でも別格レースの一つやと思ってる。

秋はもちろんマイルチャンピオンシップや。マイル三冠も夢やないぞ、

朝倉」

美途「マイル三冠、ですか」

光邦「ああ。で、来年は海外遠征。フランス、ジャック・ル・マロワ賞。ドヴィールの平坦直線千六百メートルを先頭でぶつちぎるデュエルナイフの姿を想像してみる、朝倉」

驚いたように光邦を見る美途。

光邦「その鞍上はもちろんおまえや」

美途「はい——」

強く頷く美途。

〈T〉デュエルナイフは次戦の三歳馬限定マイルGI、アーリントンカップを圧勝し、難なくNHKマイルカップに駒を進めた」

○ファルコンステークス・ゴールシーン

勝利するハイデユク。

〈T〉【ハイデユク、GⅢファルコンステークス勝利】

○ニュージールランドトロフィー・ゴールシーン

ゴール前の激戦。首差抜け出し、勝利するハイデユク。小さくガッツポーズをする颯希。その姿に颯希と力哉の声が重なる。

力哉(声)「よくやった海野！」

颯希(声)「はい！」

力哉(声)「マイルカップ、行くぞ！」

颯希(声)「はい！」

力哉(声)「強い馬が一頭いるがな……」

颯希(声)「ハイデユクのことですよね」

力哉(声)「海野、おまえ」

颯希(声)「同世代のマイラーで一番強いのはハイデユクです！ それを証明します！」

力哉(声)「競馬の神様がそう言ってるか」

颯希(声)「いえ、わたしが言ってます！」

力哉(声)「よしっ！ 全力で仕上げる！ 取るぞマイルカップ！」

颯希(声)「はいっ！」

〈T〉【ハイデユク、激戦を制しGⅡニュージールランドトロフィー勝利。四連勝でGINHKマイルカップへ】

○☆☆ホテル・外景

○同・入口

それなりに着飾りやってくる颯希。一旦立ち止まり、ため息をつく。意を決したようにして中へ。

○同・小ホール

扉を開けて中に入る颯希。横並びに椅子が四つ。寿々芽、姫香、美途が座っている。

寿々芽「おそ〜い。先輩待たせるとは不届きだ」

颯希「すみません」

姫香「ほら、座って。記者さんもカメラマンさんもお待ちかねだよ」

颯希「はい」

美途の隣の椅子に座る颯希。視線を合わせない二人。

× × ×

四人並んでの写真撮影。颯希と美途に笑顔はない。

スポーツ紙による女性騎手四人のインタビューが始まる。

記者「ではまずは千堂騎手から。いかががですか、次のマイルカップ、女性騎手四人が騎乗することになった今のお気持ち」

寿々芽「そうですね。やつとこの日が来たかと。でも意外と早かったんじゃないですか。美途ちゃんと颯希ちゃんの頑張りはたいしたものだと思います。わたしなんかデビューしてからずっとくすぶってましたもん」

記者「早坂騎手、いかがです」

姫香「はい。(颯希と美途を見て)ここ一年くらい、とにかくこの二人の追い上げがものすごくて。確かに記念すべきレースになると思いますが、これからはこの状況が当たり前のものになっていくと思います。」

二人とも強い馬に乗りますが、恥ずかしいレースはできませんね」

記者「朝倉騎手は朝日杯に続いて二つ目のGIを狙う事になりますね。今のお気持ちを聞かせてください」

美途「はい。デュエルナイフを信じて乗る、それだけです」

記者「女性騎手四人でGIに乗ることになった、それについては」

美途「——あまりそういうことは意識せず、騎乗したいと思います」

記者「同級生の海野騎手と初めて戦うことについては？」

美途「特になにも」

記者「——そうですね。では海野騎手。一気の四連勝でハイデユクともにもGI出走となりましたね」

もにGI出走となりましたね」

颯希「はい。ハイデユクは強い馬です。同世代マイラーの中でいちばん強いと思ってます」

チラツと颯希を見る美途。

寿々芽「おお〜」

姫香「言うねえ」

フツと鼻で笑う美途。チラツと美途を見る颯希。二人の様子を見ていた寿々芽。

寿々芽「記者さん」

記者「はい。」

寿々芽「バツバチなんですよ、この二人、今。わたしと姫香も覚えがあるけど。同じ空気吸いたくもないってやつ」

姫香「みたいだねえ」

寿々芽「先輩として帰らせてあげたいんだけど、ダメかな」

記者「いや、それじゃ紙面が」

寿々芽「大丈夫。わたしと姫香の赤裸々フリートークってことでお釣り来るくらいのネタ持たせて帰らせてあげるから」

記者「はあ——じゃあ最後に二人に一つだけ質問いいでしょうか」

寿々芽「(颯希と美途を見て)ほら、ここまでしてあげたんだから、最後にちゃんと答えて終わいなさい。マスコミ対応もプロの仕事の一つよ」

記者「では最後に。本番では本命デュエルナイフ、対抗ハイデユクということになりそうですが、相手の馬に勝つ自信は。朝倉騎手」

美途「勝ち方が問われるレースだと思っています。力の差を見せつけます」

記者「海野騎手」

颯希「ハイデユクはまだ底を見せていません。GⅠ馬に勝って、さつきも言ったように同世代最強マイラーであることを証明します」

決して目を見かわさない二人。

× × ×

颯希と美途がいなくなった小ホール。

寿々芽「煽りすぎちゃったかなあ」

姫香「ん?」

寿々芽「いや、美途ちゃんをね。颯希ちゃんも腹くくったみたいだしさ」
姫香「確かに、バツバチだね。あれはもう修復不可能な域までいってる

わ

記者「あの、すみません。じゃあここからは」

寿々芽「ああ、ごめんごめん。姫香、いい機会だから、あれもう言うっちゃいなさいよ。記者さんたちも手ぶらで帰るわけにはいかないんだから」

姫香「え〜、このタイミングで〜?」

寿々芽「ごんごんところ話題あの二人に持つて行かれっぱなしなんだから、強烈なのぶっこんでやりなさいよ、ほら」

姫香「しかたないなあ。まあいざれ分かることだし……あのね、わたし半年前ドバイに遠征したじゃないですか」

記者「はい」

姫香「あのとき王族からいきなりプロポーズされちゃった」

記者「ええうー?」

寿々芽「姫香が騎乗した馬の馬主の第二婦人の六男坊。オリエンタルピューティー、ヒメカ・ハヤサカがハートをズキンだよ。ちなみに超イケ

メン」

記者「で、どうしたんですか」

姫香「この前日本にやつてきた、そいつ」

記者「はあ？ その六男坊つてのが？」

姫香「うん。『プロポーズ受けてくれるまで帰らない』つて。ホテルに住んでる。親も『十五人いる子供の中にそんなのが一人くらいいてもいい』つて言ってるんだつてよ」

記者「で、その後は」

姫香「んんんんんん」

記者「ちよつと、それ、凄いネタですよ。詳しく教えてくださいよ！」
寿々芽「だから言ったでしょ」お釣りくるくらいにネタ持たせて帰してあげる』つて」

余裕の笑みを浮かべる姫香に必死に食い下がる記者。それを大笑いしながら見ている寿々芽。

○隆三のアトリエ【一週間後】（夜）

壁に賭けられた完成した自分の裸婦画を見ている美途。

隆三が入ってきて、美途の横に立つ。

隆三「どうや」

美途「――後悔は、全てなくなりました」

隆三「そうか。辛い思いもしたように聞いている」

美途「そんなのなんともないです。この絵観たくなったらまた来てもいいですか」

隆三「もちろんや」

美途「マイルカップなんか通過点です。世界を奪いにいきます。わたしとデュエルナイフで」

隆三「うん。ドーヴィルまで応援にいくわ。しかし、きみはほんまに強いなあ。ぼくの誇りや、この絵は」

じつと絵を見続ける美途。

○美浦トレセン・独身寮・一階フロア（夜）【同じく前々場面から一週間後】

若手騎手たちが、テレビを見たりしてくつろいでいる。

穰一「こんばんは」

入ってくる穰一。驚く騎手たち。直立不動になる。

騎手たち「こんばんはっ！」

穰一「颯希は部屋か」

貴康「はい」

穰一「呼んできてくれへんか。ああ、工藤君、大阪杯優勝、おめでとう。

ええ騎乗やったで」

貴康「はい、ありがとうございますー！」

颯希を呼びにいく貴康。

○居酒屋『二の脚』・外景(夜)

暖簾が出ている。

○同・店内(夜)

二人用卓で差し向いに座っている颯希と穰一。二人の前の生ビール

グラス。

穰一「お母さんも来たがってたんやどな、ちょっと風邪気味でな」

颯希「知ってる」

穰一「ああ、ようやりとりしてるんやつてな、ラインつちゅうやつで」

颯希「うん」

穰一「俺はあんなんは苦手や」

颯希「いつまでガラケー持ってるつもりなんよ。いつか調教師試験受けるんやろ。いろんなやりとりスマホやないとできひんようになるで、これから」

穰一「はは、そうやな。使い方颯希に教えてもらわなあかんな」

ビールを旨そうに飲む穰一。

颯希「ていうか、ダサイわ騎乗停止とか。デビューから一回もなかったのに」

穰一「そうやなあ。晩節を汚すいうやつやなあ。けど、スタート直後に立ち上がってあそこまでヨレられたら俺もさすがになあ——前に寿々芽にやられたのといっしょや」

颯希「いいわけやん、そんなの」

ビールを飲む颯希。

穰一「サクラコに会うてきたんやつてっ？」

颯希「え？」

穰一「お母さんから聞いた」

颯希「——うん」

穰「桜花賞は苦手の重馬場。オークスははつきりした不利。秋華賞は熱発で回避。あの馬で牝馬三冠獲れんかったのは、いまでも悔しい」

颯希「——」

穰「おまえがハイデユクに乗ってくれて、俺は嬉しい。おまえもハイデユクに乗れて嬉しいやろ」

颯希「え——」

小さく頷く颯希。

穰「その気持ちのままマイルカップ、ハイデユクに乗れ。鞍の上に恨みつらみ乗せるな。それは負担斤量になる」

颯希「お父さん」

穰「勝つてこい」

見つめあう父娘。強く頷く颯希。

颯希「お父さん、今日は？」

穰「同期でな、馬乗りでは芽が出んかったけど、そば屋やつて成功してるやつがいる。そいつのところに泊まるんや。昔語りで飲み明かしゃ」

颯希「そっか」

穰「「なんや、抱っこして寝てほしいんか」

颯希「アホかっ！」

笑う穰。

穰「もうちよと、飲もうかい」

颯希「——うん」

ビールを口にする父娘。

○東京競馬場・スタンド【NHKマイルカップ当日】

観客で超満員のスタンド。

○同・芝コーススタート地点

マイルカップ出走前。出走各馬が輪乗りをしている。六番ゼッケンのデュエルナイフ、鞍上の美途。七番ゼッケンのハイデユク、鞍上の颯希。

スターターが鞍上に立つ。関東GIのファンファーレが鳴り響く。

大歓声。

枠入りが始まる。スムーズな枠入り。

ゲートの中、相手を見る美途と颯希のタイミングが合う。数秒

間互いを見る。同じタイミングで目を外し、まっすぐ前を見る。
全馬の枠入りが終わる。

ゲートが開き発走。飛び出していく出走各馬――

(F・O)

○瀬戸内海を進むフェリー【大晦日】

○前同・そのデッキ

冬晴れの空。手すりに寄りかかり潮風を受けている颯希と姫香。
姫香「あー、ほんと気持ちいい。一人旅がよかった?」

颯希「いえ。でも姫香さんがあのテレビ観てたって知らなかった」

姫香「こちこそ会いに行ってたなんて知らなかったよ」

進むフェリー。稲島が近づいてくる。

○港に着岸するフェリー

タラップが着けられ降りてくる乗客たち。颯希と姫香も。

○稲島の港

港に降り立つ二人。そこには、寿々芽と美途がいる。驚く颯希と

美途。颯希、姫香を見て。

美途、寿々芽を見て。

そこにやってくる巫女姿の泉美。

泉美「わたしが二人にツイッターでメッセージ送ったんです」

姫香「いやあ、便利な世の中だ」

颯希「泉美ちゃん――」

泉美「仲直りしなきゃだめですよ」

寿々芽「ほら、競馬の神様のお使いが言ってるんだから言う事聞くのよ、
二人とも」

じっと見つめあう颯希と美途。二人、無言で。

○同・島の路(夕方)

美しく装飾が施されたハヤテサクラコ。その鞍上の泉美。同馬を
曳くのは真央。

子供たちがその後ろをついて歩いている。家々から人が出てきて、
ハヤテサクラコに向かい柏手を打ち、深々と礼をする。

その様子を見ている颯希ら四人。

突然拍手を打ち頭を下げる寿々芽。

寿々芽「ダービー、獲れますように！」

姫香「あつ、わたしも！三冠ジョッキーになれますように！」

寿々芽「無―理―だ―ね―」

姫香「ふっふーん。オイルマネーがバックについちゃったもんねー。いい馬

ガンガン回ってくるもんねー」

寿々芽「昔っからそういう打算的なところのある女だよあんたは！」

かまびすしく会話する二人。

言葉を交わさない颯希と美途。

○同・稲島神社・社務所・広間(夜)

島の若者たちの宴会が行われている。颯希たち四人もいること

もあつて浮かれた賑やかな雰囲気。はしゃいでいる寿々芽と姫

香。広間を出ていく颯希。

寿々芽「ほら」

美途の背中を押す寿々芽。美途も広間を出る。

○同・砂浜

穏やかな夜の海を見ている颯希。美途がやってくる。振り返る

颯希。颯希の横に並び立つ美途。砂浜に座る颯希。美途も。二

人、じつと海を見つめて。

颯希「ごめん。言い過ぎた」

美途「えーうん、だよ」

颯希「うん」

美途「やりすぎた、かもしれない。でも、後悔はしてない」

颯希の前に顔を出す美途。

颯希「？」

美途「デコピン」

颯希「えっ？」

美途「前に寿々芽さんにやってもらったんだ。姫香さんにも。だから颯

希もやっつてよ」

美途をじつと見る颯希。

美途「それで、許してほしい。絶交なんて、やっぱりいやだ」

まつすぐ美途を見る颯希。やがて頷き、美途の額に中指でデコピ

ンを食らわせる。

美途「——っつー！」

あまりの痛さに座り込む美途。

その様を見ている颯希。

美途「颯希のが、いちばん痛かった——」

笑う颯希。

颯希「そりゃあ、そうだよ」

美途「うん、だよね」

美途も笑いだす。座る颯希。

二人、見つめあう。颯希が手を伸ばし、美途の手を握る。その手を握り返す美途。

砂浜の上で固く握られる二人の手。

寿々芽「おーい」

缶ビールのロング缶を手に寿々芽と姫香がやつてくる。立ち上る二人。

寿々芽「来た甲斐があったみたいだねえ」

姫香「同級生のライバルがいる。恵まれてるんだから二人とも」

寿々芽「たまにはいいこというね、あんたも」

姫香「ずつといいことしか言いません——最初に会ったときもこうだったね」

颯希「え？」

姫香「ほら、栗東の調教コースで。こうやって四人向かい合ってた」

美途「——は？」

寿々芽「今じゃ横一線か」

そのとき響いてくる除夜の鐘。

寿々芽「お、年が明けた。はい、みんな並んで並んで」

砂浜に並び立つ四人。

寿々芽「ダービー、獲るぞー！」

海に向かって叫ぶ寿々芽。

姫香「リーディングジョッキーになってやるー！」

美途「わたしは——デユルナイフでジャック・ル・マロワ賞絶対に勝つ！」

颯希「——お父さんの勝つてないGIを勝つ！ 朝日杯、安田記念、菊

花賞、秋天、有馬記念……全部勝つ！」

寿々芽「意外とラアザコンだね」

颯希「ほつといてくださいよっ！」

美途「颯希に勝つ！」

叫ぶ美途。一瞬驚く颯希。

颯希「美途に勝つ！」

二人、見つめあつて。笑みあう。

(F・O)

○東京競馬場・芝コース

NHKマイルカップ発走。

レースは淡々と進む。先団のデュエルナイフ。後方に位置するハイデユク。

残り半マイルを切り徐々に進出を開始するハイデユク。

最後の直線で抜け出すデュエルナイフ。

他馬を引き離しにかかる。ハイデユクが一気に追いついてくる。轡が並ぶ。

叩き合いになる。

残り百メートルを切つても轡は並んだまま。必死に鞭を振るう

颯希、美途。

並んだままゴール板を過ぎるデュエルナイフとハイデユク。

大歓声が沸き起こっている。

颯希のウイニングラン。

美途のウイニングラン。

○同・地下馬道入口

デュエルナイフを止める美途。

ハイデユクを止める颯希。

二人、無言で見つめあう。

ただ、じつと見つめあつたままにいる。

○エンディング

エンディングテーマと共に、キャスト、スタッフロールが流れていく。

○東京競馬場・場内掲示板

↑写↓の表示がなされた場内掲示板が大写しになる。6と7の間に、↑同着↓の文字が赤く灯る。

大歓声が沸き上がる。

